

改革の序章、粗飼料地産地消への大転換 ～ 0 → 100 (零から百へ) ～



永禮 淳一 (ながれ・じゅんいち)
永禮 明美 (ながれ・あけみ)
岡山県津山市
《認定農業者》《家族経営協定》

推薦理由

永禮氏は平成5年(財)中国四国酪農大学校を卒業し、県外での研修後就農した。就農時は購入飼料に依存した経営であったが、遊休農地を借り受ける等飼料・基盤の拡大を図るとともに、耕種農家との連携により、稲発酵粗飼料(イネWCS)を確保し、飼料自給率の高い経営を実現した。特に、イネWCSは県下に先駆けて取り組み、給与方法を確立し、先進優良事例となっている。また、臭気対策等への取り組みや地域住民との交流を行う等、宅地化が進む中で地域環境に配慮した酪農経営を実践している。

審査において評価されたポイントは次の通りである。

1 飼料自給率の高い経営への転換

就農当時の自給飼料生産は30aのみで、購入飼料に依存していた経営であった。これに疑問を感じ、「外的要因に左右されず、最高品質の牛乳を安定的に作る経営」を目標に掲げ、農地の購入や遊休農地の借り手となり、着実に面積拡大を図り、作付け延べ面積33.9haの飼料基盤を確保した。また、耕種農家との連携により、イネWCSを確保し、通年給与を行う等、自給率の高い酪農経営を確立した。

2 イネWCSの地域への普及定着

平成12年に県下に先駆けてイネWCSへの取り組みを始めた。給与事例の少ない中、試行錯誤の上、給与方法を確立し、コストの低減と乳量、乳質を高いレベルで維持両立させている。また、津山地域の耕種農家と畜産農家で結成した飼料稲研究会の中心的な存在として、耕畜連携のシステム作りと品質向上に努め、県下最大の飼料稲産地を実現した。

3 牛群検定と受精卵移植技術による改良

牛群検定を活用した個体管理の徹底と受精卵移植技術による優良牛の自家育成を行いながら、乳量・乳質の改善を図っている。また、改良の成果をいかして、共進会にも参加し、平成12年の全日本ホルスタイン共進会では最高位賞を受賞している。

4 ストレスの少ない環境づくり

平成8年に乳牛のストレス低減と低コストによる規模拡大を図るため、フリーバーン牛舎を増設している。また、既存の繋ぎ牛舎においても、平成18年に牛床マットの設置や飼槽の改善等を行い、乳牛にとってストレスの少ない快適な飼養環境作りにも積極的に取り組んでいる。

5 地域社会と融和した酪農経営

宅地化が進む中で、土着菌を利用したたい肥生産による臭気の低減化やパーラー排水の曝気処理等、環境に配慮した経営を行うとともに、小学生の社会科見学の受け入れ、地域内消費者との交流等、地域社会と融和した酪農経営を実践している。

(岡山県審査委員会委員長 内田 義男)

発表事例の内容

1 地域の概況

津山市は平成17年2月28日に、旧津山市と加茂町、阿波村、勝北町および久米町が合併して誕生した、人口約11万人を擁する岡山県第3の都市であり、昭和4年の旧津山市制から数えると、平成21年2月11日で80年の節目を迎えた歴史ある城下町である。

また、県の北東部に位置し、地勢的には、北部は「中国山地」で鳥取県との県境をなす標高1,000～1,200mの中国山地南面傾斜地であり、南部は中部吉備高原に接した標高100～200mの盆地地帯（「津山盆地」と言われている）で、都市と自然が融合する表情豊かな地域である。

なお、年間平均気温は、13.4℃（1971～2000年の平均値、以下同様）で、年間降水量1,480.5mm。気候は、北部で年間平均気温11～12℃、年間降水量約2,500mmと日本海側気候に近く、中南部は年平均気温13～14℃、年間降水量約1,500mmと太平洋側気候となっている。

そうした同市の象徴である鶴山公園（津山城跡）は、平成16年に津山城築城400年を迎え、毎年春には約5,000本の桜が咲き乱れる西日本随一の桜の名所として有名で、昭和38年に国史跡に指定されてから、平成2年4月には日本さくら名所100選、平成18年2月には日本の名城100選、平成18年10月には日本の歴史公園100選、平成19年1月には美しい日本の歴史的風土準100選にも選ばれており、新緑の頃の藤、ツツジ、秋の紅葉、雪景色と併せ、四季を通じて訪れる人の目を楽しませる観光の拠点となっている。

一方、食において、古くから牛馬の流通拠点としても栄え、牛の内臓を食す文化が根付いていた地域であるが、昨年11月秋田県横手市で開催されたB級ご当地グルメの祭典「B

「1 グランプリ in YOKOTE」にて、「津山ホルモンうどん」が見事、初出場3位の快挙を成し遂げており、同市の新たな観光名物となっている。

さて、同市の農業は、肉用牛、採卵鶏、水稻、西條柿、アスパラガス、生姜、山の芋、ニューピオーネ等が主な作目で、中でもアスパラガスは、畜産堆肥も有効に利用され、生産量、栽培面積ともに県内トップクラスの産地となっている。畜産の農家戸数（平成21年8月現在）は、酪農が58戸（2,354頭＝県下の12.2%）、肉用牛経営が177戸（7,554頭＝県下の21.1%）、養豚が5戸、採卵鶏が18戸、ブロイラーが6戸で、酪農・肉用牛経営戸数は年々減少傾向にある。

この津山市において、当経営は通勤酪農を行っているが、牧場は自宅から1,100m離れた市内でも大きい町内会が存在する志戸部地区にあり、すぐ近くには市内で2番目に生徒数が多い鶴山小学校があるなど周囲は住宅が建ち並ぶ状況となっている。

2 経営・生産の内容

1) 労働力の構成（平成21年）

区分	経営主との続柄	年齢	農業従事日数（日）		部門または作業担当	備考
				うち畜産部門		
家族	本人	36	280	280	飼養管理・自給飼料生産	
	妻	33	100	100	牛舎環境整備、子牛管理	
	父	60	280	280	経営管理、搾乳	
	母	61	280	280	搾乳	
常雇						
臨時雇	延べ人日		125人		搾乳、飼料給与、堆肥散布	

2) 収入等の状況（平成21年1月～12月）

（単位：円）

項目		金額	備考
酪農部門収入	生乳販売	48,207,651	436,066 kg（家事消費含む）
	初生牛販売	847,245	27頭
	育成牛販売	646,875	和牛ET3頭
	奨励・補填金等	5,872,001	
	乾草・堆肥	1,710,750	
	共済金	955,280	
	その他	993,117	
	計	59,232,919	
その他部門収入		29,048	

3) 土地所有と利用状況

区分		実面積 (ha)		飼料生産利用延べ面積 (ha)	
			うち借地面積		うち借地面積
耕地	水田				
	転作田	634	593	1,902	1,780
	飼料畑	496	350	1,488	1,050
	未利用地				
	計	1,130	943	3,390	2,830
草地	個別利用地				
	共同利用地				
	計				
野草地					
山林原野					

4) 自給飼料の生産と利用状況 (平成 21 年)

使用区分	飼料の作付体系	面積 (a)		所有区分	総収量 (t)	主な利用形態等 (採草の場合)
		実面積	延べ面積			
採草	イタリアンライグラス	187	280	自己	70	1番草・2番草: ロール
	〃	943	1,415	借地	354	〃
	スーダングラス	187	280	自己	117	〃
	〃	943	1,415	借地	590	〃
	飼料稲	534	534	契約	130	ホールクロップサイレージ
兼用						
飼料用トウモロコシ						

5) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績（平成 21 年 1 月～12 月）

経営の概要	労働力員数 (畜産部門・2000時間換算)		家族・構成員	2.8 人
			雇用・従業員	0.2 人
	経産牛平均飼養頭数			50.8 頭
	飼料生産用地延べ面積			3,390 a
	年間総産乳量			436,066 kg
	年間総販売乳量			434,971 kg
	年間子牛販売頭数			30 頭
	年間育成牛等販売頭数			0 頭
収益性	酪農部門年間総所得			9,388,579 円
	経産牛1頭当たり年間所得			184,815 円
	所得率			18.3 %
	経産牛1頭当たり	部門収入		1,012,058 円
		うち牛乳販売収入		948,970 円
		売上原価		855,166 円
		うち購入飼料費		471,855 円
うち労働費		123,882 円		
うち減価償却費		141,674 円		
生産性	牛乳生産	経産牛1頭当たり年間産乳量		8,584 kg
		平均分娩間隔		14.8 カ月
		受胎に要した種付回数		2.5 回
		牛乳1kg当たり平均価格		110.0 円
		乳脂率		3.9 %
		無脂乳固形分率		8.67 %
		体細胞数		43.2 万個/ml
		細菌数		3.3 万個/ml
	粗飼料	経産牛1頭当たり飼料生産延べ面積		66.7 a
		借入地依存率		83.5 %
	乳飼比(育成・その他含む)			49.7 %
	生乳100kg当たり差引生産原価			9,227 円
	経産牛1頭当たり投下労働時間			116 時間
安全性	経産牛1頭当たり借入金残高(期末時)		401,744 円	
	経産牛1頭当たり年間借入金償還負担額		116,267 円	

(2) 技術等の概要

地帯区分	中間農業地域	
飼養品種	ホルスタイン	
後継者の確保状況	無	
飼養・搾乳	飼養方式	つなぎ、フリーバーン
	搾乳方式	パイプライン、アプレスト
	牛群検定事業	有
飼料	自家配合の実施	有
	TMRの実施	有
	通年サイレージ給与の実施	有
	食品副産物の利用	有 ビール粕、パイン粕
繁殖・育成	ETの活用生産の実施	有
	F ₁ 生産の実施	有
	カーフハッチの飼養	無
	採食を伴う放牧の実施	無
	経産牛の自家産割合	91%
販売	加工・販売部門の有無	平成22年～
	地産地消の取り組み	
その他	肥育部門の実施	
	協業・共同作業の実施	(有)まほら
	施設・機器等共同利用	無
	共同堆肥センターの利用	無
	ヘルパーの活用	有
	コントラクターの活用	有
	公共育成牧場の利用	有
生産部門以外の取り組み		

6) 主な施設・機械の保有状況

種類	名称
畜舎・施設	フリーバーン牛舎、育成舎、乾乳牛舎(改造)、運動場(屋根)、ミルクングスルー、サイロ2基(昭和54年)、サイロ9基(昭和49年)、FRPサイロ、飼料倉庫、堆肥舎(屋根付)、汚水処理施設、事務所(改造)
機械・器具	バルククーラー、バルククーラー(冷水)、パイプラインミルクカー、バンクリーナー、インバーター換気扇、飼料給餌機、牛歩(発情発見装置)、トラクター3台、小型ユンボ1台、モアコンディショナー、ロールベラー、ラップマシーン、CFフィダー、ロールカッター、パワーハロー、プラウ、播種機、糞乾燥機、袋詰機、パソコン、トラック 他

7) 家畜排せつ物の処理・利用状況

(1) 処理の内容

処理方式	混合処理
処理方法	<p style="text-align: center;">開放型ロータリー</p> <p>牛舎 → 牛ふん乾燥施設 → 堆肥舎 → 販売・土地還元</p> <p style="margin-left: 2em;">水分調整</p> <p style="margin-left: 2em;">切り返し発酵</p> <p>バンククリーナー ショベルローダー</p> <p>※土着菌、酵素利用(良質堆肥化と消臭対策)</p>
敷料	粉砕チップ、かんなくず、戻し堆肥

(2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等
販売	30%	家庭菜園、野菜農家等
交換		
無償譲渡		
自家利用	70%	自給粗飼料生産

3 経営の歩み

1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和43年	酪農＋ 稲作(30a)	子牛3頭	0a	父母が導入・経営開始
〃 46年	〃	経産牛30頭 育成牛3頭	30a (水田裏のみ)	繋ぎ牛舎建設(父母)
〃 50年				堆肥の製造販売開始
〃 62年				日本原高校(酪農経済科)入学
平成3年				中国四国酪農大学校入学 家畜人工授精士、大型特殊自動車、牽引、 家畜体内受精卵移植士免許取得
〃 4年				近隣小学校の社会科見学受入開始
〃 5年	酪農＋ 稲作(30a)	経産牛35頭 育成牛17頭	30a	同校卒業 愛知県にて酪農研修(4～6月) 就農(7月～)
〃 8年	酪農専業	経産牛44頭 育成牛35頭	161a	認定農業者となる フリーバーン牛舎・アprestパーラーの 導入(繋ぎ牛舎と併用/自己資金)
〃 10年				家族協定締結(津山地域初) 本人・父・母の3名
〃 11年		経産牛55頭 育成牛20頭	270a	スーパーL資金借入(農地購入)、結婚
〃 12年				イネWCS給与試験開始 第11回全日本ホルスタイン共進会 最高位賞(高円宮賜杯)受賞 津山市農業後継者協議会および津山地方農 業青年クラブ協議会の会長就任
〃 14年				夏作・スーダンの作付開始 イネWCS給与開始
〃 16年				堆肥の悪臭防止のため、土着菌の活用検討 家族協定締結の見直し 本人・妻・父・母の4名
〃 17年			430a＋ 飼料稲約2ha	搾乳パーラー排水処理のため、4槽の連続 曝気槽設置
〃 18年			830a＋ 飼料稲約3ha	カウコンフォート(ニューヨークスタイルへの変更、 飼槽および牛床の改善)に取り組む
〃 19年			1,080a＋ 飼料稲約 5.7ha	土着菌の繁殖成功 津山地域飼料稲生産利用研究会の初代副会 長に就任
〃 20年		経産牛58頭 育成牛9頭	1,080a＋ 飼料稲 903.6a	イネWCS通年給与量確保、粗飼料自家・ 地域産給与率95%を実現 第24回中国地区ブラックアンドホワイト ショー 経産牛第8部チャンピオン

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
〃 21年		経産牛51頭 育成牛21頭	11.3ha（延べ 33.9ha）＋ 飼料稲 534 a	粗飼料自家・地域産給与率 85%
〃 22年		経産牛57頭 育成牛12頭 （預託13頭）	〃	経営移譲 土地約 8 ha 借入（来年以降自給飼料作付増 へ） 【 現在に至る 】

2) 過去5年間の生産活動の推移

	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年
畜産部門労働力実員数（人）	4	4	4	4	4
飼養頭数（頭）	54	57	57	55	51
販売・出荷量等（t）	486	476	502	479	435
畜産部門の総売上高（千円）	54,934	52,639	54,783	55,074	51,413
主産物の売上高（千円）	50,036	47,741	49,810	48,559	48,208

4 特色ある経営・生産活動の内容

1) 明確な経営目標

平成5年3月、本県にある（財）中国四国酪農大学校を卒業し、愛知県の酪農家で3ヵ月の研修後、後継者として就農した。酪農もビジネスなので、儲かる経営を目指すこととし、平成8年には認定農業者になっているが、収入の増加を図るため乳量を追求した穀物の多給や価格変動がいつあるか分からない安い輸入粗飼料に頼る酪農家が多いことに、当初から疑問を感じていた。実際就農後、牛群改良を図りながらも同様な乳量の追求で、日量33kg/頭を搾乳するレベルに至ったことがあるが、牛だけでなく人も無理をし、その割に所得が伸びなかったことを体感した。そこで、在学中や酪農青年研究連盟等の研修で様々な経営タイプを学んだ経験も踏まえ、自分の経営目標を「外的要因に左右されず、最高品質の牛乳を安定的に作る経営」と明確に掲げ、安全で良質な粗飼料を給与し、乳量は少なくとも疾病による治療や更新費用等を抑えた低コスト生産に努め、牛を健康に飼うことで所得を向上させる道を選択した。

そして、「最高の牛乳は最高の粗飼料から」という意志のもと、次の2つのプロジェクトを実行している。

2) 地産地消（粗飼料自家・地域産給与率）100%の実現へ

(1) プロジェクト1：自給粗飼料の生産拡大

就農当時、自給粗飼料生産は、水田裏作のイタリアンライグラス（1番草）30aのみで、

購入粗飼料での飼料設計（TMR）だったことから、品質・収量においても十分ではなく、搾乳牛への給与は全くない（ゼロの）状況であった。その後、本人の強い意志により、飼料作物の生産拡大に着手し始め、特に、平成11年にはスーパーL資金を本人名義で借入、飼料作物生産用農地を取得し、平成18年には離農した酪農家の農地（約4ha）を、平成19年には近隣の遊休農地（約2.5ha）を耕種農家から借り受けるなど、着実に面積の拡大を図っている。そして、平成21年には、作付面積11.3ha（延べ利用面積33.9ha）にイタリアンライグラスおよびスーダングラスを栽培するまでになり、大幅な粗飼料給与形態の変更が可能となった。さらに、平成22年は、約8haの農地を借り受けることが出来ており、来年以降の生産体制を検討しているところである。

また、飼料作物の生産には、土づくりが重要であるとの考えから、自家産良質堆肥の投入や深耕はもちろん心土破碎や粗反転混和耕などを徹底的に行うことで、飼料作物の品質や収量の向上を図っていることに加え、本人がTMRの飼料設計を行っているため、毎年の飼料分析も欠かさない。

なお、作業機械については、必要以上の所有は極力避け、廃業農家から中古機械などを導入し、車整備の特技を活かして自らメンテナンスなどを行いながら、経費削減に努めている。

(2) プロジェクト2：稲発酵粗飼料（以下、イネWCSとする）の利用拡大

平成12年からイネWCSの給与試験を行い、県下に先駆け、平成14年から本格的に給与を開始している。飼料用稲（以下、飼料稲とする）は、近隣の耕種農家と契約し、本人もメンバーとして加わっているコントラクター組織が収穫調製作業を行い、ロールラッピングしたイネWCSを購入し、TMRにして給与している。利用当初は、刈り取り時期や発酵品質がもう少しで、実の部分がほとんど消化されずに排出されるなどの欠点があり、育成牛と乾乳牛にしか給与していなかったが、カロチン含有量が多くNDF量も豊富な事や嗜好性が良いことなどから、給与試験の結果や様々な試験場のデータを集め、独自に検証を行い搾乳牛への給与を開始した。

契約面積も年々拡大を図り、平成20年には約9haで723ロール（約235t）を確保し（実際の利用は520ロール、その他は販売等）、イネWCSの通年給与体系（搾乳牛1頭1日当たり8kg）を実現した。このことは、コストダウンはもとより十分な乾物が供給できたことで、牛の健康維持にも効果があった。なお、平成21年は、通年給与が可能な量を想定し（成分バランス等を考慮し、搾乳牛1頭1日当たり6kgに変更）、契約面積は5.34haとなっている。

このように、イネWCSの通年給与が可能な酪農経営は県下でも少なく、まだまだ自らの実証による試行錯誤は続くが、汎用型飼料収穫機に代表される品質と保存性の向上や新品種の開発（既に今年度中国飼198号を作付済）等の追い風もあり、経営にとって最も有効な活用方法を今後も追求していく考えである。

一方、地元耕種農家と契約している農地は約9ha85筆（最大時）にも及ぶため、近畿中国四国農業研究センターが開発した「作業計画・管理支援システム」をいち早く導入

し、パソコン上での農地管理を実施しており、行政等への各種書類の提出にも役立てている。

(1) + (2) : 牛のエサにも地産地消、適地適作があり、飼料作物にも旬があると当牧場は考えている。そのため、ほぼ100%の購入粗飼料依存型から完全な脱却を図り、自家産飼料作物とイネWCSをあわせた、顔の見える粗飼料の給与率を95% (平成20年) まで高めるまでになった。実は、残り5%は心の余裕 (多くの意味を含む) と100%に対する固執はないものの、新たな土地も確保し、地産地消 (粗飼料自家・地域産給与率) 100%の達成は現実のものとなっている。

3) 乳牛が快適に過ごせる環境へ

平成8年に乳牛のストレス低減と低コストによる規模拡大を図るため、フリーバーン牛舎およびアプレストパーラーを選択し建設した。また、既存の繋ぎ牛舎との併用により、新設分 (フリーバーン牛舎) は300㎡の30頭規模に留め、立地条件や労働力、堆肥処理等を勘案しながら、自己資金による適正かつ堅実な規模拡大を行っている。2種類の牛舎は、牛の状態 (以前は搾乳量、現在は繁殖性等) に応じて使い分けているが、産乳量の増加、飼養管理・ふん尿処理の省力化、搾乳時間の短縮にもつながった。

また、平成18年には乳牛が本来持っている遺伝的能力を発揮させるため、繋ぎ牛舎において、牛床マットの設置やつなぎ方 (ニューヨークタイストールへ) の変更、飼槽の改善や換気方向の変更等、乳牛にとってストレスの少ない環境作り、いわゆるカウコンフォートにも取り組んでおり、関節障害等の疾病に加え残滓の減少や掃除のしやすさによる作業時間の短縮等目に見える効果として現れている。

4) 牛群検定や受精卵移植技術を活用した乳牛の改良

牛群検定成績の活用により個体ごとの繁殖成績や乳質などを把握し、受精卵移植 (以下ETとする) 技術による優良牛の自家育成を行いながら牛群改良に努めてきたことで、イネWCSを多給しながらでも県平均を上回る乳量 (検定成績) を維持している。

ET技術については、平成2年当時は未成熟の技術であったが、優良形質の増加と改良速度の向上のためと父である幸雄氏が地域に先駆けて積極的に導入し、本人が就農してからは父とともに、当時設立された美作地域ET推進協議会にも積極的に参加するなど、ET技術の確立と地域への波及に大きく貢献している。

さらに、乳牛改良の一環として、共進会にも参加しており、常に上位入賞を果たしている。特に、2000年に岡山県で開催された第11回全日本ホルスタイン共進会では、オラホーム・ブレンダ・デュリーガル・スター・ET号 (第10部 (経産4歳以上5歳未満) 首席) が最高位賞 (高田宮賜杯) を受賞し、その後も、2008年第24回中国地区ブラック&ホワイトショーにおいて、本牛の孫が経産牛第8部でチャンピオンを受賞するなど、本牛およびその子孫は採卵牛となり、経営内や地域の牛群改良に大きく貢献している。なお、本牛は、今でも当牧場に健在である。

5) 良質な堆肥生産と自給粗飼料への活用

昭和50年から他の畜産農家に先駆けて、堆肥の製造販売を行っている。良質堆肥の生産に力を注ぎ、以前から廃棄物ではなく、資源としてとらえ、作物にとって良質な堆肥とは何かを追求しながら、平成19年からは土着菌を活用するなど耕種農家のニーズにあった堆肥生産を心がけてきており、固定客も多い。また、当時は自給粗飼料生産がほとんどなかったため、ほぼ全量販売しており、周りに堆肥販売を行っているところがなかったことも好影響し、大きな収入源となっていた。しかし、近年は、自給粗飼料の生産拡大に伴う必要量の増加はもちろんであるが、「最高の粗飼料は良質な堆肥から」という考えのもと、自家利用を優先しており、需要に対して供給が不足する状況となっている。今までとは異なり、耕種農家のためから自分の経営のために堆肥を生産するようになったが、当時からの思いが活かされる格好となっている。

ちなみに、固定客への堆肥不足は、当牧場の土着菌を提供し、同じ副資材を使ってもらった堆肥を購入して対応しており（平成21年：4 t車×50台分）、顧客ニーズを保つ努力は怠っていない。

6) 家族経営協定による明確な役割分担と意識改革

就農当初より口頭で休日や給料を決めていたが、平成10年に津山地域で最初の家族経営協定（本人・父・母）を締結し、休日等はもちろん各種研修会に積極的に参加できる時間を確保している。さらに、平成16年には妻の明美氏を含めた四者で協定の見直しを行った。現在は、出産・育児等もあり、家族経営協定と家族間の話し合いで決定した役割分担に基づいて働いているが、役割が明確になったことにより、それぞれが自分の役割の中で常に収益性の改善を意識するようになり、経営全体として高い向上心を維持できている。

なお、各人の主な役割は、本人が飼養管理と自給粗料生産、妻が環境美化と哺育、父が経営管理（20年以上前からパソコン簿記に取り組み、次年度以降の経営に生かしている）と搾乳、母が搾乳となっており、家族経営協定に名前はないものの、長男と次男も、学校から帰ってくると牛舎の掃除などを手伝っている。兄がしているのを見ては、自然と弟もするようになったようで、将来は4人の息子が手伝う姿が見られそうだが、淳一氏本人がそうであったように、「僕も酪農をするんだ」と言ってもらえ、憧れの存在となるような経営主を目指している。本牧場に、後継者の心配はないだろう。

また、平成22年1月に本人へと経営移譲がなされており、今まで以上に経営全体を見渡す必要があるが、牛を健康に飼うことで所得を向上させる道を選択したことに迷いはなく、イネWCSの活用模索や牛の更新等の問題で昨年の成績は不満足なもの、今が発展途上の若き経営者であり、今後の手腕が期待される。

5 地域農業や地域社会との協調、貢献

1) イネWCSの普及推進

平成12年からイネWCSの給与試験を開始したが、近隣に給与している農家や確立されたデータはなく、ほとんどがゼロからのスタートの中、生産する耕種農家も手探り状態で、

イネWCSに対する考え方にも大きなズレがあった。そこで、お互いがメリットを共有できるシステム作りを模索し、堆肥の土壌還元も含めた耕畜連携を提案しながら、畜産農家が求める品質への改善を図り、地域における生産・流通・利用が円滑に進むよう尽力してきた。この結果、津山地域は県下で最大の飼料稲生産地となっているが、耕畜連携が進んだ背景には、本人が農業後継者の活動やJA青年部等の活動（5の4）参照）を通じて、目先の儲けだけでなく、地域のために長年活動してきた事の評価により、彼がリーダーなると耕種農家に思わせた結果と考えられる。

さらに、平成19年度には、飼料稲を生産する耕種農家とイネWCSを給与する畜産農家で組織された津山地域飼料稲生産利用研究会の初代副会長に就任し、地域の水田営農と畜産経営の発展に努め、平成20年には、津山地域の先駆者であり最優良事例として、本人が主役のパフレットも作成され、津山地域におけるイネWCSの普及推進に貢献している。

一方、イネWCSは利用したいが、生産した農地への堆肥散布が出来ない酪農家があるため、利用促進の手助けとして、堆肥散布を請け負っている。平成21年は16.5haに堆肥散布を行ったが、もちろん自家産はないため、近隣の肥育農家から2tダンプ×147車分を購入して対応しており、これも堆肥処理に困る畜産経営を支えることにつながっている。

2) 地域環境に配慮した酪農経営

当牧場の周辺は、宅地化が進んでおり、隣には小学校やマンションが隣接している。このような条件の中で酪農を続けていくためには、環境への配慮や近隣住民との理解醸成が必要不可欠である。今までも、堆肥の切り返し作業を近隣住民が窓を閉めている夜中に行うなどの配慮に努めていたが、平成16年から悪臭対策と良好な発酵に効果のある土着菌の活用について検討を始め、平成19年の秋に自家繁殖に成功し、大きな効果をもたらしている。なお、近隣の酪農家や肥育農家にこの土着菌を提供しており、経営内にとどまらず他の地域の畜産環境改善にも一役かっている

また、平成17年には、搾乳パーラー排水対策として、4槽の連続曝気槽を設置するなど、地域環境に対する問題意識は極めて高い。

3) 牧場体験等を通じた地域交流

津山市内で2番目に大きい鶴山小学校が隣にあることから、平成4年から毎年小学生の社会科見学や写生大会の受け入れを行っており、現場のありのままの姿を見てもらい、本当のミルクの匂いや風味、命の大切さを伝えるなど、食育の一端を担っている。見学に来た子供たちのうち何人かは、必ず学校帰りに来るようになるそうで、最近では、近くの保育園の散歩コースにもなっている。もちろん並行して、酪農や牛乳の良さを知ってもらうための活動や、消費拡大の行事も開催している。

また、酪農大学校や県外農業高校生の研修受け入れや美作ブロック「緑の学園(就農志向高校生)」の視察研修の受け入れ、農業高校生の家畜審査競技への牛の貸し出しなど、地域農業への貢献は大きい。

ちなみに、平成22年度の地域畜産ふれあい体験交流活性化事業にも協力頂いており、12

月には、透明バケツミルカーを用いた搾乳体験（ミルクがたまっていく状況が見て分かり、子どもたち等に好評）などを実施する予定になっている。

4) 地域社会への貢献活動

平成12年度からの3年間、津山市農業後継者協議会(①)および津山地方農業青年クラブ協議会(②)の会長として、商工会青年部といった異業種との交流や地元消費者(美作大学生)との農作業体験交流等地域活動に率先して取り組むほか、岡山県新農業経営者クラブ連絡協議会(③)の副会長、JAつやま青年部(④)の副部長、岡山県JA青壮年部(⑤)の副会長、おかやま酪農業協同組合青年部(⑥)の委員長を歴任し、地域農林行政への提言を行うなど各組織活動の牽引役として活躍しており、地元農家はもとより農業関係団体等からの信望も厚く、地域農業のリーダー的存在となっている。役員を退いた今でも、新規就農者や後輩の相談にのるなど後進の育成に努めているほか、「青空知事室」や「局長と語る会」では、農業後継者の代表として参加し、農業の現状を発信している。

また、津山市・とまた・久米郡の農協合併の際は、農協青年部合併推進委員会の委員として、農協青年部の合併に尽力し、津山市消防団の部長として、近隣の子ども会に出向き、火の用心や防火研修を行っているほか、地域のスポーツ少年団では、ソフトボール、サッカーなどの先生として、PTA活動では役員として地域社会に貢献している。

さらに、津山警察署の少年警察協助手として、警察署と連携しながら街頭補導活動や地域のお祭り等で巡回指導を行うなど、青少年の非行防止にも努めており、活動範囲は多岐に渡っている。

年度	役 職 (農業系のみ)						
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
9			理事				
10			編集委員				
11			副会長				
12	会長	会長		副会長			
13	会長	会長		副会長			
14	会長	会長		副会長			
15	監事	監事		会計			監事
16	監事	監事		会計			監事
17				副部長			監事
18				副部長		委員長(会長)	監事
19					副会長	委員長	監事
20					副会長	副委員長	監事
21					理事	副委員長	監事

⑦＝岡山県酪農青年研究連盟

6 今後の目指す方向性と課題

1) 生乳での有機JAS取得を長期目標に掲げており、単に販売を有利に運ぶためのものではなく、第三者に評価された証明を得ることは、「最高の牛乳」を自己満足に終わらせないという考えの延長にある。ただまずは、自家・地域内粗飼料給与率を100%とし、安心・安全で安定した生乳生産体制を築きたいと考えている。

2) 一方、自家産牛乳の活かし方として、加工部門への取り組みが考えられるが、当牧場の場合、検討はしたものの、個人ではリスクが大き過ぎると前に進まなかった。ただ、その思いは抱き続けており、淳一氏だからこそその取り組みへと発展している。今までの交流が活かされ、畜産に限らず、多種多様な職業の有志26名が集まり、平成17年、共同出資で「(有)まほら」を設立した。現在、津山市から農場の管理・運営を委託され、イチゴ（ハウス3棟）やブドウ（9ha）を柱とし、サツマイモ、タマネギ、柿などの生産を行い、販売はもちろん収穫や作業体験を実施している。また、昨年には菓子製造業の届け出を済ませた加工場を併設し、採卵鶏の経営者も加わっていることから、秋冬の農業閑散期に向け、当牧場の牛乳とでプリンやケーキの商品化を研究しており、メンバーそれぞれの志が高く、今後様々な方向性が期待できるものとなっている。

ここでも、目指す先は、津山で育った安全な農産物を津山の人に食べて頂きたいという「地産地消」や「環境に優しい農業」のモデル経営なのである。

3) 後継者候補は、大勢いる。ただ、今の場所での規模拡大は厳しいため、現農場を任せるのは1人、と決めている。だからこそ、それぞれが牧場を持ち、お互いに競い協力しながら永禮兄弟牧場がそれぞれの地域の核となり、社会に貢献できる姿を夢見ている。これに対して最大の協力者となることは言うまでもない。

【写真】



牧場の遠景



粗飼料の地産地消



牛舎と搾乳施設



快適な環境作り



全共最高位賞獲得



良質な堆肥生産



家族経営協定の締結



牧場体験と地域交流